

平成 24 年 11 月 27 日

日本セーリング連盟 会員各位

国際委員会
委員長 堤 智章

2012 年 ISAF 年次会議および総会に関するレポート

標題の件について、下記のとおりご報告申し上げます。

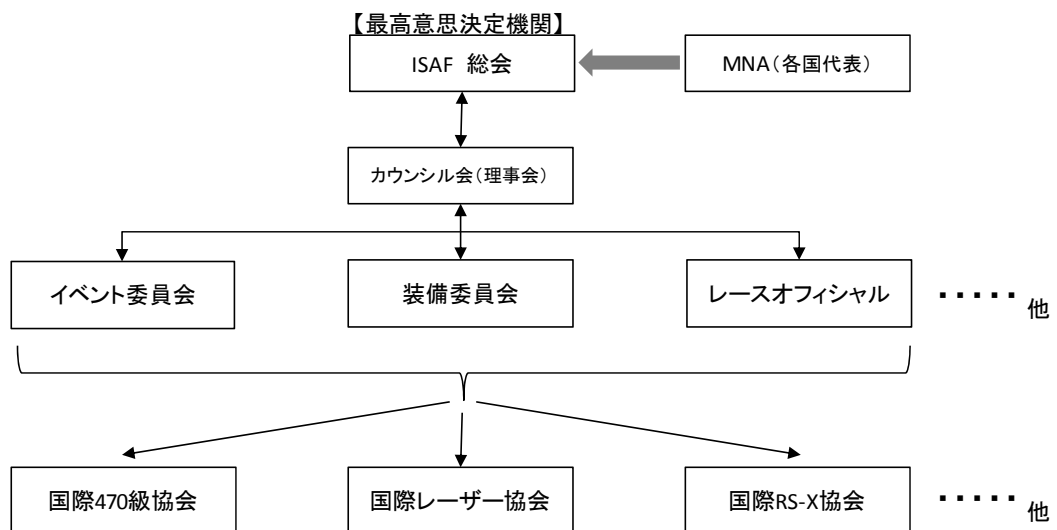
記

1. ISAF 年次会議と総会について

○私は、今年初めて ISAF 年次会議と総会に日本代表として参加致しました。会員の皆様と同様、『ISAF って何しているところ??』という疑問から、JSAF や所属している艇種の協会がどのような関係にあるのか、JSAF の国際委員会の役割は何かについてからご報告致したいと思います。

会員の皆様から見てわかりにくい ISAF（国際セーリング連盟）とは、我々 JSAF と各艇種協会が所属している世界的なセーリング競技における最高意思決定機関になります。簡単に会社の例でイメージすると、各国代表（MNA と呼ばれます、JSAF など）が株主で、株主総会が ISAF 総会と考えて頂ければ結構です。

総会の下部にはカウンスル会（理事会）が存在し、その下に各委員会が存在しています。先の例でいうと、カウンスル会は会社の取締役会に相当し、各委員会は事業本部になります。（下図ご参照）



セーリング競技において今回のトピックスであるオリンピック艇種の具体的な提案例

を申し上げますと、国際カイト協会（もしくはMNA、加盟各国協会）が2016年のオリンピック艇種になることをイベント委員会へ提案し、装備委員会が艇の評価をした上、イベント委員会で検討しカウンシル会へ意見具申。カウンシル会で決議を行い、その承認をISAF総会で決議するという流れになります。

- ここで大切なことは、会員の皆様を感じるセーリングのよりよい方向への改善提案をもっと日本発で行っても良いということです。些細なことでも、ISAF総会へ議案を上げることができるのです。更にその前にもうひとつ、JSAF内においても各艇種協会や各種委員会と国際委員会が気軽に密に連絡をとって、国際委員会を窓口としてISAFに意見具申をするノウハウを持つこと、そして、国際委員会は外交活動を通じて、その意見を民主主義の総意として世界に認めてもらうことができる力を持ち続けることがとても大切なことです。
- ここ数年、日本はオリンピック艇種の選定においては、河野会長以下国際委員会メンバーが、積極的に各国の調整役や議案提出役を務めてきました。世界各国の代表は、理にかなった考え方である日本案を支持し、結果的に日本の考える艇種構成になりました。しかし、オリンピックの艇種選定のみならず、もっと大きな目でセーリング自体を楽しく豊かにしていく為に、『日本発の提案、動議を気楽に増やそう！』と思って頂き、どんどんと国際委員会へご相談が増えればと思っております。国際委員会は、会員の皆様から見てその活動がわかりにくい委員会であったかもしれませんが、今回のISAF総会ではRS-X級をオリンピック艇種に戻した外交活動を、成功させた功績を上げています。これは、国内RS-X協会が河野会長、国際委員会へ相談を持ち込んだことからスタートして、各種ロビー活動を現地で地道にした上で、日本の提案に世界114か国のうち、51.7%の国々が賛同してくれた結果であることをどうかご理解ください。

2. 今年の年次会議のトピックス

- ISAF年次会議と総会の詳細については、JSAFホームページの国際委員会のページに掲載させていただきますが、いくつか大きなポイントについてご報告致します。

①会長、副会長選挙実施

2012～2016年のISAF会長として、イタリアのカルロ・クローチェ氏が選出、アジアからは、中国のリー・チャンハイが副会長に選出されました（他含み7名）新体制は、ヨーロッパ勢力と南北アメリカ大陸勢力の争いでありましたが、ヨーロッパ勢力が指導権を握る結果となりました。日本は、イタリアに投票しています。カルロ氏は、父もISAF会長を務めるヨット名門家の出身ですが、非常にフランクにリーズナブルな判断をする点をJSAFとしても評価しています。

一方中国には、ISAFワールドの青島誘致、ロレックスセーラーオブザイヤーの獲得、オリンピックでの金メダル獲得、ISAF副会長選出と、日本の先を行くアジア新興勢力のリーダー国となりました。今後は、日本の国家戦略として、JSAFの各分野にお

ける世界での日本のプレゼンスを、早急に上げることが望まれます。

②新委員会、新カウンスル会の選定

2012年～2016年の新カウンスル会には、大谷たかを氏が再選を果たしております。また、各委員会の選出結果は下記のとおりです。立候補した候補者がすべて選出されていることは、戸張前国際委員長の長きに渡る外交力による結果です。

- ・イベント委員会（オリンピック艇種等を検討する委員会） 大谷たかを氏【再任】
- ・艀装委員会（艇の評価や艀装に関する委員会） 堤 智章氏【新任】
- ・競技規則委員会（ルール関係の委員会） 柴沼克己氏【再任】
- ・オフショア&オセアニック委員会（外洋関連の委員会） 小林 昇氏【再任】
- ・レースオフィシャルズ委員会（IJ、IMの関連委員会）
- 国際ジャッジ小委員会（下部組織） 増田 開氏【新任】
- 国際アンパイア小委員会（下部組織） 田中正昭氏【新任】

艀装委員会は、JSAFから初めて就任します。アンパイア小委員会も8年ぶりのポスト獲得となりました。

③オリンピック艇種変更

2016年のオリンピック艇種を、RS-X級からカイトセーリングに変更する提案を、今年5月のISAFミッドイヤー総会(中間総会)にて、イベント委員会の推薦を覆し、カウンスル会にて僅差で決議しました。

この時より、日本を含む世界各国は、カイトセーリングが競技として未成熟である点や、IOCの競技選定にある5大陸での普及度合いと参加可能国の比率、ボックスルールと呼ばれる“ワンデザインクラス”と異なる備品選択方式で費用に対する資金力差が顕著にでる点等から、RS-X級に艇種を戻す活動を開始致しました。

ISAFは前述のとおり株主総会的ですから、各種規則が制定されています。

この場合変更を決議するには、①ISAFの年次総会でカウンスル会が3/4以上(75%以上)の賛成を持って変更の再決議をするか、②ISAFの総会でMNA(各国)提案をして過半数以上で決議するか、どちらかしか道が残されていません。

総会で現地入りする前から、Eメールにて世界各国と連絡をとり意見を調整し、現地ではまず、カウンスルである大谷氏を中心にカウンスル会の再決議に向けて、多数派工作をしました。しかし、75%である28票にわずか2票届かず再否決となりました。残る方法として、日本から総会での提案を行い(結果として、香港・イスラエル・フランスも同調提案実施)過半数を獲得するしかありません。入念に、ロビー活動を行ってマイノリティーの国々(カイトもRS-Xもない国)にも理解を求めました。総会当日では日本から提案主旨を説明し、賛同する国々の支援を受け、最終投票を行った結果51.7%(114か国中)の賛成を受け、劇的にRS-X級に艇種が再変更

される案が可決されました。

多くの国々から賛同を得た理由は、『カウンシル会の決議は、一番の敬意を表し、尊重すべき決議であるが、世界各国の少数国を含むすべての意見を反映しているとは限らない。是非この総会場で世界の意向集約を行いたい』とスピーチしたことであると思います。どちらかのクラスの否定を行うのではなく、有能な全世界のセーラーに適切なジャッジメントを求めた結果、利害が関係している国以外の賛同を多く集められたと私は分析しています。

3. 今後の課題

○まず、2020年の東京オリンピック誘致、各種世界選手権の日本開催誘致を鑑みれば、これからもっと若いJSAF会員の皆様に国際的な活躍を頂く場面を、多く設定していくことが国際委員会の責務であると考えます。IROやIJ、IMの登録人数は、世界で866名登録されている内、わずか11名とまだまだ欧米各国に比肩して劣後しています。ISAF内、世界での日本のプレゼンスを上げるには、オリンピック選手などの活躍ももちろんですが、選手と役員が一体となった高まりを作る必要があります。セーリング競技の現役から指導者、指導者から役員へのステップアップのルートを確立し、日本人の多才な才能を世界で発揮すべきと思います。

国際委員会としては、現ベテラン委員が役職任期期間中に、そのノウハウや人的なつながりネットワークを継承し、次世代を担う人材の確保と育成に努め、外交窓口としての機能充実を更に図っていきたいと考えています。

○また、今回のISAF総会では、行政の縦割り組織に似た傾向にあったJSAF内の艇種協会と委員会がクロスして活動し、河野会長以下、有能なノウハウを持つプロ人材が、RS-X級のオリンピック艇種復活という難題をやり遂げました。現在も、国際420級の世界選手権の日本誘致に向けて河野会長の指揮の下、420協会、JSAF各委員会と連携して、誘致活動を行っております。ここで重要なことは、県連や学連、ジュニア・ユース、各艇種協会、各JSAF委員会も、同じ目的を持つ集団として、力を合わせて組織の同じ目的を達成する活動を増やすべきであるということです。『JSAFが何もしてくれないと嘆くことではなく、自分がJSAFに何ができるのかを考え、純真な気持ちで、できる範囲で行動に移すこと』が重要であると思います。我々のJSAFはその活動予算を見ても、会員の皆様の希求にこたえるほど潤沢ではありません。しかし、JSAFの会員が2世、3世セーラーとなり、セーラーとして引き継がれてきたノウハウは大きなものとなってきました。その力がこれからのJSAFにとって大きな動きとなることを期待してやみません。

以上